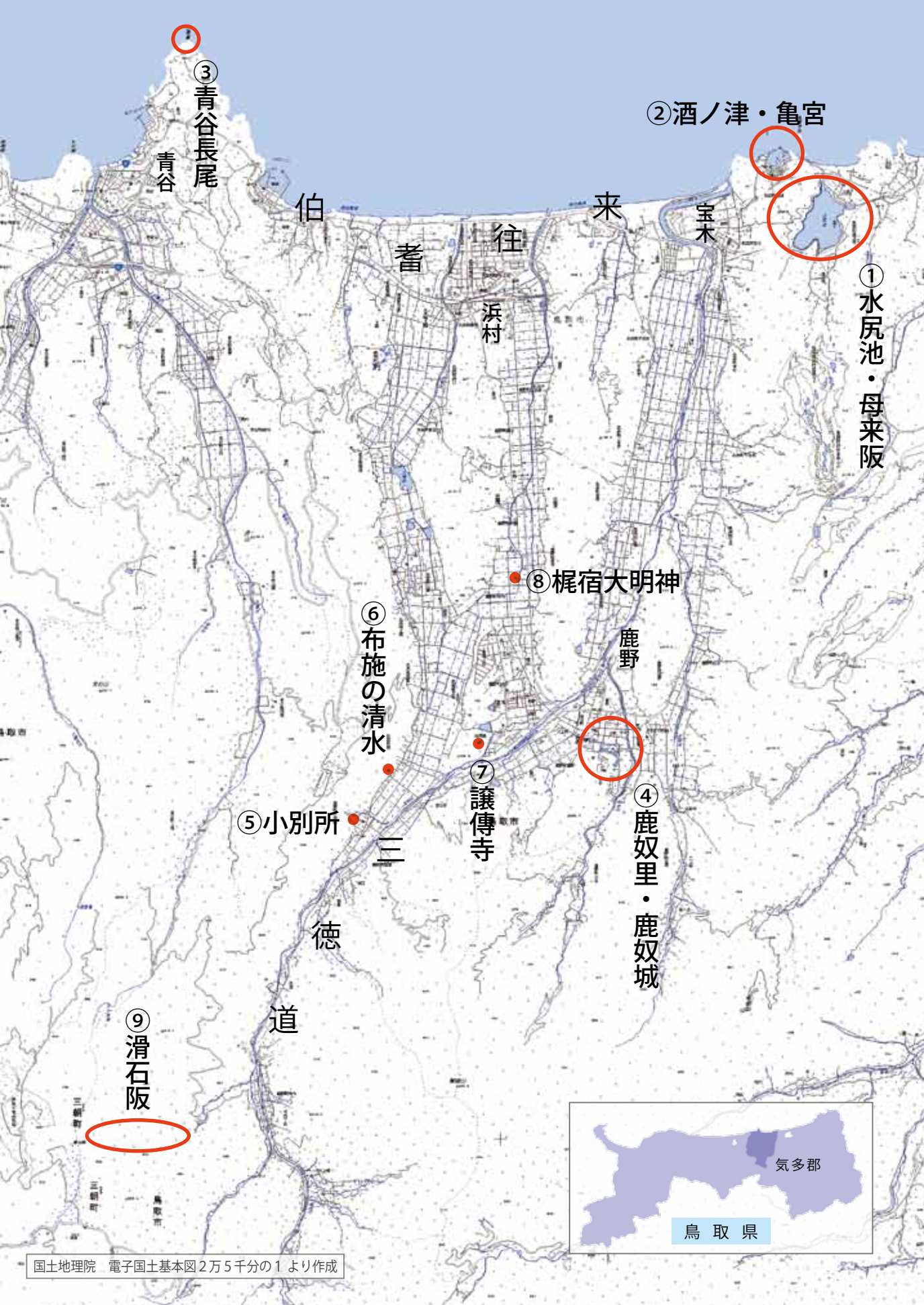


『稲葉
佳景
無駄
安留記』

調査報告

(気多郡篇)



②酒ノ津・亀宮

①水尻池・母来阪

③青谷長尾

⑧梶宿大明神

⑥布施の清水

⑤小別所

⑦譲傳寺

④鹿奴里・鹿奴城

⑨滑石阪

加賀郡

鳥取県

はじめに

無駄安留記は、安政五年（一八五八）に成立した地誌である。著者は米逸処という商人とされている。現在の鳥取県東部にあたる因幡国の八郡、邑美郡・岩井郡・法美郡・高草郡・気多郡・八上郡・八東郡・智頭郡の景勝地や旧蹟などについての文章、絵、和歌や狂歌が記載されている。ちなみに著者の自筆本は鳥取県立図書館に所蔵されている。

今年度は気多郡について調査を行った。気多郡とは、現在の鳥取市鹿野町・同青谷町・同気高町にあたり、明治二九年（一八九六）に高草郡と合併し、気高郡となった。気多郡には伯耆往来と鹿野往来、三徳道という三つの主要な道がある。作者は伯耆往来と三徳道に沿って歩き、無駄安留記を記録していったと考えられる。

気多郡の調査を通じて見えてきた無駄安留記の作者の意図について、ここでは地形と名所という二つの側面から考えてみる。無駄安留記は、杖突坂や滑石坂のように地形的なものと、鹿野城や譲伝寺、梶宿大明神などのように名所や寺社仏閣などの記述に分かれている。そして地形では地理的な記録、名所では風俗や伝承などの記録に焦点がおかれている。作者は名所と地形の情報を多様な観点から記録することで、地誌としての厚みと深みを持たせようとしたのではないだろうか。

このように、無駄安留記には気多郡の伝承・習慣・風俗・地理が幅広く記録されている。この報告書によって、気多郡という地域に暮らしていた人々の文化、生活を少しでも感取していただけたら幸いである。

（大石 遥）

水尻池・母来阪

無駄安留記には水尻池と母来阪（無駄安留記本文には「阪」とあるが報告書では「坂」に統一）を描いた絵が載せられている。これを実際に現地撮った写真と比べてみると、ほぼ同じ構図なのにもかかわらず、写真には母来阪が写っていない。

無駄安留記本文には水尻池について、次のように記されている。

水尻池 魚鼈数品。母来阪よりの風景最勝なり。漁舟眼の下に、村落林間まばらなる。渺々たる砂漠野水緑を争うさま也。



これを現代語訳すると、「水尻池には数々の魚がいる。母来坂から見た風景は非常に優れている。眼の下には池に浮かんでいる漁舟が見える。村落は林の中に点在している。広く果てしない砂漠が広がり、野原と水が緑を争っているように見える」となる。

水尻池は白兔海岸から約二五〇メートル西に行った、気高町の奥沢見にある。奥沢見の読みは「おくぞうみ」である。『因幡志』に

は奥沢見という地名について次のような記述がある。

今比地を奥澤見と云ふは大澤見の誤謬なり。古記に大澤見とあるは高草の小澤見に對するなり。小澤見昔は氣多に属せり。

つまり、現在は高草郡に属している小澤見は、昔氣多郡に位置していた。そのため小澤見に対してこの土地を大澤見という名前と呼ぶようになった。現在の奥沢見という地名は、その大澤見を言い間違えて呼ばれるようになった、ということである。ただし、地名の由来については異なる説もあり、『新修 氣高町誌』には次のように書かれている。

奥沢見は「おくさわみ」が「おくぞうみ」に転じたもの。（中略）サハ（ワ）ミは池のことである。この場合は水尻池を指し、水尻池の上流側（奥）に位置することから奥沢見の地名が生まれたのだろう。





このように、地名の由来については諸説あり、どれが正しいのかは、はっきりしない。

水尻池は、日本海の入江だったが、砂により海と分離して現在のような池になった。池に面して北東に水尻の集落、山陰本線を挟んで南に奥沢見の集落がある。大正時代には池は干拓されており、三十年ほど前までは稲作もおこなわれていた(『鳥取県大百科事典』)。

無駄安留記の絵には水尻池のそばに田圃が描かれており、当時から稲作がされていたことがうかがえる。『因幡志』には水尻池の大きさについて「東西三町四十五間南北五町二十間周廻三十五町四十五間」とある。これを現在の尺度に直すと、「東西四〇九メートル南北五九〇メートル周囲三九〇〇メートル」となる。これは湖山池と比べると約四分の一の大きさである。

本文中には「魚鼈」とあるが、これは具体的にはなんのことだろうか。『因幡志』の水尻池について書かれた箇所には「池あり鰻蜆等多し」とある。鰻は「ボラ」、蜆は「シジミ」である。さらに『稲場民談記』には

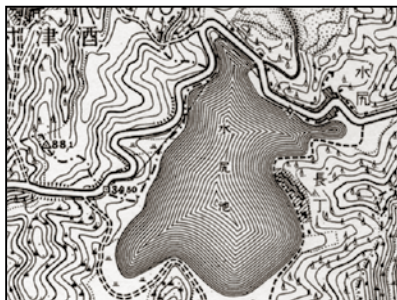
は「ボラ・イナ・鰻・コノシロ・車鰻アリ」と書かれている。イナとはボラの幼魚、コノシロはニシン科の魚、車鰻は「クルマエビ」である。したがって「魚鼈」とはボラやシジミ、鰻、クルマエビなどのことだと考えられる。本文中には「漁舟」が池に浮かんでいても書かれており、上のように絵の池にも船が描かれている。したがって当時水尻池では多種多様な魚が獲れ、そのために漁が盛んにおこなわれていたこ

とがうかがえる。ちなみに、『鳥取県大百科事典』によれば、現在も、フナ・ボラの漁、養鯉が行われている。

さらに本文には、「村落林間まばらなる」とあり、絵の中にも家々が点々と描かれている。それではこの「村落」とは具体的にどこを指すのだろうか。現在の地形図で確認してみると、絵の中に描かれている場所には「長丁」と書かれた集落が存在していることがわかる。さらに、明治三〇年に測量された地図にも、同じように「長丁」と書かれている。したがって、「村落」とはその「長丁」を指しているのではないだろうか。ちなみに気高町中央公民館の方に伺ったところ、「長丁」の読みは「ながつちよう」であるという。「長丁」という地名は住所などでは使われておらず、通称として呼ばれていると公民館の方は仰っていた。

無駄安留記には、水尻池について次のような和歌が記されている。

荒波をきらふてここに澄む月の
清き心は水しりぬらむ



明治 33 年 陸軍省 2 万分の 1 地形図



国土地理院 電子国土基本図 2 万 5 千分の 1

これを現代語訳すると、「海の荒波をきらって水尻池に澄んだ影を写す月の清らかな心を池の水はきつと知っているだろう。」となる。この歌では「澄む」と「住む」が、「水尻」と「水知り（ぬらむ）」が掛け言葉になっている。近くの海とは対照的な水尻池の静けさと、そこに映る月の美しさが思い浮かぶような歌である。

続いて母来坂について述べる。なお「母来」とは現在の宝木のことである。本文を見ると次のようになっていいる。

母来坂 西邊の大阪なり

これを現代語訳すると、「母来坂は西の果てにある大きな坂である。」となる。ここで言う「西の果て」とはどういうことだろう。母来坂の東には村や集落があり、そこから見て西の果てに母来坂があるという意味なのだろうか。

水尻池を左手に見下ろしながら登っていく道が母来坂である。当時この坂は交通の要所で旅人の通り道にもなっており、坂の麓には母木新町宿という宿場があった。本文には「母来坂 西邊の大阪なり」とある。『因幡志』には坂の長さが「十九町五十間」とあり、これは約二二〇メートルである。さらに、『勝見名跡誌』には、母来坂について次のような記述がある。

母木坂 母木ノ新町ヨリ三四町東ニアル大ナル坂ヲ母木坂トイフ。

以上のことから、母来坂は確かに大きな坂であったことがうかがえる。

なお、今回の報告書では取り上げていないが、母来坂の東には杖突坂という坂がある。さらに、『勝見名跡誌』（鳥取県立図書館蔵）には、杖突坂と母来坂の中間に位置する、中ノ坂という坂についての記述がある。母来坂、中ノ坂、杖突坂について『勝見名跡誌』には、「何レモ同シヤウナル大ナル坂ニテ難所ナリ」と記されている。このように、この三つの坂はいずれもかなりの難所だったようである。

無駄安留記には母来坂についての和歌もあり、それはこのようになっている。

母来阪ちち草めぐむ春くれば

みどりこまつの手をのばすらむ

これを現代語にすると、「母が子に乳を恵むように、野に緑を恵むちち草が芽を出す春が来れば、乳児が待ちかねたように乳房に手を伸ばし、小松の枝も伸びるだろう。」となる。

ここでは「ちち（草）」と「乳」が、「松」と「待つ」が掛け言葉になっている。ちち草とは、乳草とも言い、つるや茎などを切ると白い汁を出す植物の俗称である。母親の母乳とちち草の白い汁を連想させているのである。ちち草とは具体的には、ガガイモ・ノウシル・ノゲシなどを指す。このように和歌からは、春が来て高い坂の上に生い茂っている美しい緑が想像できる。

無駄安留記の作者が高い坂を登り、少し休憩した時、そこから見える水尻池の風景や草木に目を奪われ、それらを記憶に留めるために絵や和歌を残したのかもしれない。

（大石 遥）

酒ノ津・亀宮

酒ノ津とは鳥取市気高町の地名である。白兎海岸から西へ海岸沿いに二キロメートルほど進んだ所に位置している。亀宮は昔そこにあつた神社である。

酒ノ津について、『因幡志』に次のように記されている。

其土地隘く、山腹を切平らして段々に家造りす。専ら漁業をなせり。此地元は樽谷と云ふ。亀井武藏守郡主の時海邊に谷とは相應ならずとて、樽の縁に依て酒津と改名ありしと云ふ。

これによると酒ノ津はもともと「樽谷」と呼ばれていたが、鹿野城主亀井茲矩統治の時代に、海辺に谷とは相応しくないとして「樽」の字にゆかりのある「酒」をあて、酒ノ津と改名した。「津」は港、船着き場という意味である。また、土地が狭く山腹を切り開いて、集落が密集しており、村民はもっぱら漁業をなりわいとしていたとも記されている。

『稲場民談記』によると、主な産物は鯛・コチ・鯖・牡蠣・アワビ・サザエ・ハマグリである。無駄安留記の酒ノ津の様子を描いた絵にも、樽の淵の様に曲がった海岸線と、周りを山に囲まれて山すその狭い土地に集落が密集している様子が見て取れる。

無駄安留記の本文には酒ノ津について次の様に述べられている。

人尔綱引きさせ給ふ。霊亀を得て奉る。吉兆なりとて祠を建て亀宮と崇祭連とおおせことありし由。

これを現代語訳すると、「東野岬に鎮座している。社頭からの風景は絶妙である。昔、池田家分家の東館の方が御遊覧に來られた時に、漁民に網を引かせなされた。大亀を得て（東館の方へ）奉った。これを吉兆として祠を建て、亀宮と崇め祭れという仰せことがあつたということである」となる。

同様の記述が以下のように『因幡志』により詳しく載っている。

享保元年勝見御入湯の時、御姫君御同道なされ四月廿一日此浦御遊覧ありて漁人に網をたれさせ玉ふ時一つの龜網中にかかり來れり。大さ甲の徑り三尺六寸横二尺八寸高一尺二寸其體相尋常ならず是神龜ならん精霊を國土豊饒守護神たらしめんとて龜をはやがて海中に放ちやり此所に小社を建られ龜の宮と崇め玉ひし。



現代語訳すると、「享保元年（一七一六）勝見入湯の時に池田家の姫様が同行された。四月二十一日に酒津の浜を遊覧なさって、漁民に網を引かせた。その時一匹の亀が網にかかった。その大きさは甲羅の縦三尺六寸（約一〇八センチメートル）、横二尺八寸（約八四センチメートル）、高さ一尺二寸（約三六センチメートル）」とその体は尋常ではなかった。これは神亀だろう、その精霊を国土豊穡の守護神にしようということで、亀をすぐに海中に戻し、その場所の小社をお建てになり、亀の宮として崇敬なさった」となる。内容が酷似しているため、無駄安留記の作者は『因幡志』を読んでその伝承を知ったのではないだろうか。

しかし、『因幡志』には、以下の様に、これとは異なる伝承も記されている。

其遷宮五月六日とかや。神體を何にかせんやと評議まちななる折節、此浦人出雲國日の御崎の神前の海中より釣針に掛かりしとて一の奇石を歸りける間、「かかる時節にこう此石の釣の絲にかかり來りしも不思議なれ、是神龜の感應ならん」とて即ち其石を形代となし玉ひける。今の神體是なりと云傳えたり。

現代語訳すると、「その遷宮は五月六日だったとか。遷宮された社の神體を何にしようかと話し合っている時、酒ノ津の村民が出雲の日御崎の神前の海中で釣りをしていたところ、一つの奇石がかかった。海へ返そうとしたが、ちょうど神體を何にしようかと相談している時にこの石が釣り針にかかったのは不思議なことだ、神龜の感應に違いはないとしてその石を御神体とした。今の神体はこの石だと言い伝えられている」となる。日御崎には寛永二年（一六四四）建立の日御崎神社が存在して

おり、島根半島の西端に位置し、日本海に面している。恐らく、出雲の日御崎の神前とは素戔鳴尊すさのおのみことと天照大御神を祀るこの神社の事を指して言っているのではないだろうか。一般的には鏡や御幣が御神体となる。しかし亀宮は村民が釣ってきた石をご神体しているという点で珍しい。『酒ノ津史散歩』

によれば当時の東館の主は松平摂津守（元禄五年十一月一日生、當時五〇歳）、「姫臣」はその娘、輝子（享保一〇年九月一三日生、當時一七歳）で、この事があつた後、輝子が病にかかったり災厄に遭ったとき、この亀の加護を受けたという。『酒ノ津史散歩』には亀宮の建設位置について、次のように触れられている。

亀ノ宮さんの建設位置は、モメン屋、嘉七郎から借りた水帳面の一五坪である。今では臨港道路ができていますが、近年までは、この岩の上から魚釣りをしていた。岩の上には昭和初期まで祠と松の木一本が生えていたという。

この記述から場所を推測すると、どうやら無駄安留記の絵に描かれている山の社とはまた違う社のようなのだ。



写真1

現在の亀宮を調べるために現地を訪れると、無駄安留記の社は見つけることはできなかったが、前述の社の跡を見つけたことができた。既に社はなく、家屋のブロック塀に囲まれた岩だけが残っていた（写真1）。無駄安留記の絵には亀宮の社の下に「戎宮」と併記された社が描かれている。『酒ノ津史散歩』によるとその社地は「東西七間、南北五間、山地森あり。村より東北の方に当る」と記されている。亀宮については、「東西五間、南北三間。平地。村より東北の方に当る」とあり、方角は共に東北で合致している。しかし亀宮は平地と記されており、山頂近くの急斜面に建つ無駄安留記の亀宮の絵とは一致しない。なぜ無駄安留記の作者が、実際には平地に建つ亀宮の社を山の上に描いたのかは不明である。

また、実際に調査に行ったとき、酒ノ津に江戸時代から続く東昌寺のご住職の話を伺うことができた。それによると、神仏分離以前の名残で、お寺でお経を読み終わった後に唱える回向文に、亀宮大明神の名前がでてくることだった。

最後に、作者が詠んだ狂歌について触れたい。

好きたもう 酒ノ津ならば 万世も

もりてのみませ 亀宮の神

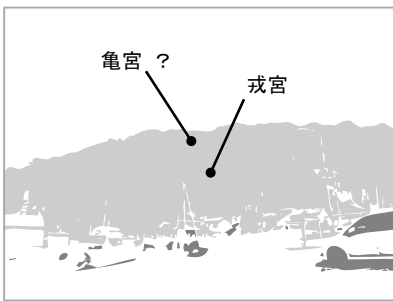
この中で「もりてのみませ」の「もりて」には、盃に酒をなみなみと「盛る」と、「守る」という二つの意味が掛かっている。これをふまえると、「お好きなお酒を永遠になみなみと盛ってお飲み下さい、亀宮の神よ」と、「酒ノ津がお好きならば永遠に守ってください亀宮の神よ」という二通りの解釈ができる。亀は酒を好むと言われており、このことから作者はこの

ような歌を詠んだのではないだろうか。

今回の調査では、無駄安留記に描かれている亀宮の社を確認することはできなかった。しかし、戎宮（清水谷神社・エビスさん）の位置は『酒ノ津史散歩』に記載されていた。その場所を写真2で示している。無駄安留記の絵と比べて見ると、戎神社の左手に亀宮の社があることになる。と推定できるが、そこに亀宮があったという根拠は、無駄安留記の絵以外では確認することができなかった。戎宮は『酒ノ津史散歩』には「昭和三年頃の大風で祠・建物が飛び散り」とある。もし、亀宮の社があったとすれば、その災害の時に一緒に崩れたりしてしまっただけで、今はもう存在していないのかもしれない。

（森本 航太）

写真2



青谷長尾

無駄安留記本文に記されている長尾鼻は、現在の鳥取県青谷町の北に位置し、滑石峠から北へ伸びる尾根が日本海に長く突き出した形となっている岬である。「長尾」という名前の由来は、『因幡志』に「滑石坂の山背南より北へなだれて海に斗出す。其亘り三里餘なり。是を長尾山と號す」とあるように、鹿野町河内の滑石峠から約一二キロメートル余も連なる長い尾根であるということからきている。

長尾鼻については、同じく『因幡志』に、「此山は大凡氣多郡の中位に在て南より北へ亘り姫路と青谷兩村の間を突き分けて海中へ出づること数十町なり。其所を長尾鼻と云ふ。山脈河内村の滑石坂に相連て三里に餘れり。長尾と號するは其故なりと。面して東は大坂西は日置谷なり。

土人一郡を東西に山東山西と云ふは長尾山を標準とするの習はし也。抑長尾の鼻と云ふは風景に富たる所にて舟磯の澳遙かに出て青屋の方へ引めくる。其間七十町餘なり」と詳しく記載されている。

現在、長尾鼻は西因幡海岸県立自然公園として指定されており、絶景であること、スズキやクロダイなどの釣り場であることで知られており、釣り師の間でも有名な場所だという。



長尾鼻について、無駄安留記には以下のような記述と狂歌がある。

因幡海陸より遠望。この長尾を際り西は不見。

この鼻の岩間に芒を産す。富士の一もとに類す。

萬世の龜の長尾の小薄は

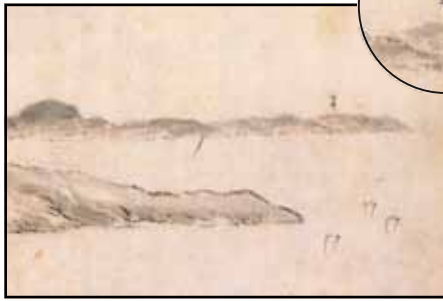
よはひもともに延るとぞ見る

まず記述の部分を前半と後半に分け、それぞれ解釈していく。

「因幡海陸より遠望 この長尾を際り西は不見」。この部分を現代語訳すると、「因幡の海や陸から遠くに眺めることができる。この長尾から西側は長尾にさえぎられて見えない」となる。現地調査に赴いた際に、鶴木坂辺りから見ると、確かに長尾鼻から西は見る事ができなくなっていた。

しかし、無駄安留記に描かれている絵では、長尾鼻の奥に、もう一つ長く突き出した岬のようなものが描かれている。浜村海岸から眺めてもみたが、長尾鼻の後方にそのような岬はなく、これはいったい何なのか





Mapionより作成



という話になった。

地図を調べ、長尾鼻から見える範囲で別の岬はないかと見たところ、長尾鼻のすぐ西側、東伯郡湯梨浜町の海岸に、尾後鼻という岬があった。長尾鼻の先端から尾後鼻を見ると、岬の形もよく似ていた。また図をよく見てみると、長く突き出した岬の上に小さく「セキ」と書き込まれていた。そこで、長尾鼻の後方の長く突き出した岬のようなものは尾後鼻を描いたもので、「セキ」とは「積」で「重なる」といった意味か、もしくは、岬を表す「サキ」が変化したものではないかと解釈し、どちらにしても「セキ」は尾後鼻が重なって見えることを示しているものと考えてみた。

だが、重なって見えることを「セキ」という語で表すのは不自然だし、「セキ」と聞いたとき最初に連想するのは島根半島に位置している美保関であるとの意見が多く、美保関である可能性についても調べることとなった。確かに、地形的に言えば見える位置にあり、かつ長尾鼻よりも長く突き出して見えるため、図に一番近い形になるだろうと思われる。尾後鼻では短すぎ、長尾鼻よりも長く突き出しては見えないの

である。

調べているうちに、偶然、同じ無駄安留記に載っている「伏野洗濯嶋」の絵に、「長岬」という表記で長尾鼻が描かれていることに気がついた。また「伏野洗濯嶋」の絵だけでなく別の絵にもいくつか長尾鼻が描かれており、その長尾鼻の後ろにも「青谷長尾」の図と同じように長く突き出した岬が描かれていた。「青谷長尾」の絵と「伏野洗濯嶋」の絵を比較してみたところ、長尾鼻と背後の岬は全く同じ構図で描かれており、また「伏野洗濯嶋」の絵には、大山と思われる大きな山も内陸の方に描かれていた。この大山と突き出した岬の位置関係からも、セキは美保関であるという結論に至ったのである。

しかし、元々「伏野洗濯嶋」

の絵は、作者が船に乗り、海に出て描かれた絵である。同じ構図であるということ、
「青谷長尾」の絵も、海から見て描かれた絵である可能性が出てきた。最終の現地調査で、長尾鼻に実際に上り見る
こととなった。当日はいにく悪天候だったため、先端までは行くことができなかったが、長尾灯台にちょうど灯台守の方がおられたため話を聞いてみた。すると、灯台守の方々も長尾鼻から美保関を見



伏野洗濯嶋

たことはないと言う。「天気がよく、空気も澄んでいるなど条件が整っていれば、もしかしたら見えることはあるかもしれない」ということもおっしゃっていたが、いくつか無駄安留記の絵を見る限り、作者はしばしば、その場になにも、見えないものを、その場に存在しているかのように描く技法を使っているようである。そのためこの美保関も、実際に作者が条件の整った日に長尾鼻に上り美保関を見ることができたのか、もしくは地形的に美保関が見えることを知っていたため推測によって美保関を描いた可能性があると考えられる。

次に後半部分についての解釈である。

この鼻の岩間に芒を産す。富士の一もとに類す。

まず「富士の一もと」についてであるが、和歌に出てくる語句のように思われたので、『新編国歌大観』で和歌に富士の一もとが出てくるか調べたが、そのような例はなかった。次に「一もと」について調べたところ、ヒトモトスキという草が存在するというのが分かった。この草は多く海岸近くに生え、関東南部から西側、九州や沖縄まで広範囲に分布しているという。また大型であり約二メートルまで成長するとされ、名前の由来は、「一株から多数の葉が出、薄のように手を切りやすいことを表したもので、実際には薄の種類ではないとされている。鳥取県と島根県では準絶滅危惧種と認定されており、現在鳥取県では大山町にのみ生育しているそうである（鳥取県公式HP）。

次に、富士についてであるが、大山はその形が、米子や松江の方から見たときに、富士山のように古典的で整正な形であるから、古くから「伯

耆富士」と呼ばれている（『山陰歴史散歩』）。『山陰歴史散歩』だけでなく『山陰 歴史と風土』などにも同じように書かれてあるが、いつ頃から大山が「伯耆富士」と呼ばれていたかについて、何冊か関連する本を読んできたがどれも明らかにされていない。一般に「富士」と聞くと富士山を連想するが、富士山の植生を調べたところヒトモトスキは生育していないようであった。また鳥取県三朝町にも小富士山という山が存在するが、こちらもヒトモトスキとの関係性が見られなかったため、ここでの「富士」とは大山のことであると解釈できるのではないかと思う。

以上から、現代語訳すると、「長尾の岬の岩間に芒が生えている。この芒は大山の辺りにも生えているというヒトモトというものと同じ仲間である」となる。

次に、狂歌の解釈である。

萬世の亀の長尾の小薄は

よはひもともに延るとぞみる

これは、「いつまでも長尾に亀井茲矩の恩恵が残っているように、長尾に生えている小さな薄も未だ年を経るとともに長く伸び続けているように」と解釈できる。

『鳥取県の地名』には、「文化九年（一八一二）の夏泊浦旧格由緒書状（磯江家文書）などによると、文禄年間（一五九二―九六）豊臣秀吉の朝鮮出兵の折、筑前国「梶免村」助右衛門という漁夫が鹿野城主亀井茲矩の水先案内人を勤め、のち鹿野で亀井氏に仕えた。やがて助右衛門が茲矩



ヒトモトススキ

http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/c/c0/Cladium_chinense_hitomotosusuki.jpg

に海浜の適当な所に居住したいと願出たところ、「其方共兼て漁師之儀并女房海士名人」との事由で、西は潮津浜、東は長尾境の間の漁業権を認められ、夏泊の八町四方の地を御免地として与えられた。これにより助右衛門は夏泊を開き、彼の妻が海女の業を伝えたという」との記述がある。夏泊とは、長尾鼻と潮津との間にある村であり、『因幡志』にも、「潮津より十八町^{うしろ}良の方長尾鼻の谷隘にある村なり潮津の枝村とすこの村の初は亀井武藏守殿の時筑前の國より漁夫一人来住し其より漁村となれり（ルビは筆者）」とある。この女房が伝えた海女の技術が、この地での海女の始まりといわれている。山陰海岸では唯一の海女漁の地となっているが、現在では後継者不足により途絶えかけているという。

このように、長尾と亀井茲矩の関係は深いものと見られるため、狂歌の中の亀は亀井茲矩と解釈した。

今回調査を行うにあたって、長尾鼻にはなかなか現地に赴くことができず、手持ちの資料は鶴木坂から見た長尾鼻の写真しかなかった。そのため無駄安留記の絵にある「セキ」と書かれた陸について様々な意見が出て、中々まとまりがつかなかった。最終調査でようやく長尾鼻に上ってみることができた。天候は悪く先端まで行くことはできず、木々の間から見てもそれらしき陸は見えなかった。しかし、長尾灯台の灯台守の方から話を聞くこともでき、「セキ」の正体についてある程度の解釈ができた。現地に赴き実際に見たり、地元の人のお話を聞いたりすることが、現地調査を行うにあたりいかに大事かということが分かった調査だったと思う。

（下田 あゆみ）

鹿奴里・鹿奴城跡

「鹿奴里」は、現在の鳥取市鹿野町鹿野にあたり、鹿野町の中央よりやや北に位置している。この「鹿奴」表記だが、現在は「鹿野」であるのに、なぜこのように表記してあるかを調べてみた。

『因幡志』には、「鹿野」「鹿奴」どちらも用いており、二つをどのようにに区別しているかは分からなかった。ただ同書には次のように書かれている。

鹿野と云ふ里國中二ヶ所あり。當所鹿野は或は志加奴或は志加野と書く。皆鹿野の假名書にて奴野は音通なり。

これを現代語訳すると「鹿野という里は国中に二ヶ所ある。当所鹿野は志加奴、或いは志加野と書く。どちらも鹿野を假名書にしたもので、奴と野は音通である」という意味になる。「音通」とは五十音図の同行、または同段の音と音が転換する現象のことで、そうすると、もともと「シカノ」と呼んでいたものが「シカヌ」になった、或いはその逆ではないかと推測した。しかし音通にはまた別の意味もある。同じ音を別の漢字で表わす、という意味である。『角川大辞源』で調べると、「野」は人名に用いる時「ヌ」とも読むらしい。そうなると、もともと「シカノ」と呼んでいたのか、「シカヌ」と呼んでいたのか分からない。いずれにせよ、この表記については調査不足に終わった。この報告書では統一するため、無駄安留記本文以外は「鹿野」と表記する。

次に本文の説明をする。無駄安留記には、鹿野里についての説明と狂歌が記載されている。以下が無駄安留記本文である。

亀井侯在城の跡山上妙見宮社頭美麗なり 風景秀逸
櫓台外堀今を存す 町外の遠望無双 茶店の旅客を見て

うれし気な顔の紅葉は肴にも

酒にも秋の小男鹿の里

これを現代語訳すると、「亀井侯在城の跡が残る、山の上にある妙見宮の社殿の前は美麗で、風景は秀逸である。櫓臺と外堀は今なお存在している。町外を見渡すのに、他に並ぶものがないほど景色がよい。茶店の旅客を見て、（狂歌）うれしそうな旅客の顔の赤みはまるで紅葉のようで、その様子は肴にも酒にも満足しているように見える。小男鹿のよう美しく、また肴も酒も飽きるほどあり栄えている鹿奴里の秋の風景である。」となる。

以下、無駄安留記の本文に沿って説明していく。

戦国時代の鹿野城は、因幡国気多郡（後の気高郡）の要衝として山名・尼子、やがて毛利・織田（羽柴）による攻防の舞台となった。そして、天正九年（一五八一）、鳥取城が羽柴秀吉によって落城した後、鳥取城攻めの功績を認められた亀井茲矩が鹿野城主となる。



戦国時代、鹿野城は妙見山という山に築かれた山城だったが、亀井茲矩により石垣・櫓が築かれた。山麓には新たに内堀・外堀・薬研堀を巡らせた本丸・二の丸が整備され、藩政の中心となった。城山神社のあたりには、現在も礎石の跡が残っている。

実際に城山に登ってみると、無駄安留記の通り、見晴らしがよく、遠くまで見渡せる場所であった。またちょうど紅葉の季節に行ったため、狂歌に「秋の小男鹿の里」と詠んであるのも頷ける綺麗な景色を見ることができた。

ここで亀井茲矩について少し説明する。亀井茲矩（一五五七―一六二二）は、安土桃山時代から江戸時代に活躍した武将で、織田信長の支援を受け出雲・尼子氏再興を図る山中鹿之助の下、安芸・毛利氏と戦った。鹿野城主となった後は、干拓、水路開設などの行政面における手腕を発揮した。また文禄・慶長の役では水軍を率い、朝鮮でも戦っている。徳川政権下においては、農業開発、銀山開発、水路開設などの行政に着

手する一方で、シャムと朱印船貿易を行うなど、世界に視野を広げた実業家でもあった。亀井茲矩が行った政策は以下のようなものがある。

- ・日光池の水を水路を作って海に流し、新田開発
- ・大井手水路開設
- ・「村々きらざる木」の掟をつくり、桑、漆など自由に伐ってはならない木を定める
- ・薩摩から杉苗を取り寄せ、鷲峰山に植林
- ・鹿野笠の製作を、農業の副業として勧める

亀井茲矩は城主であった二十八年の間、領内で善政をしき、多くの業績を残した。鹿野の人々は亀井茲矩の業績を称え、現在もなお「亀井さん、亀井さん」と言って親しんでいる（『鳥取県郷土が誇る人物誌』）。次に本文に出てくる「妙見宮」について説明する。この妙見宮とは「城

山神社」のことで、鹿野城跡に登る途中に在る。古くから「妙見大明神」として鹿野の人々から崇拝されていたそうだ。『鳥取県の地名』によると、妙見大明神は亀井氏が鹿野城の鎮守として勧請したと伝え（県神社誌）、文化十年（一八一三）には亀井茲矩時代に行われていた神事の再興を願ひ出て許可されている（在方諸事控）。この神社は神輿、幟差の若武者、四台の屋台（京都祇園祭の山鉦を模したという）などが、紺屋町と大工町の間で御幸行列を繰り広げるもので、宵宮の綱灯籠（提灯祭）と併せて壮麗さで知られ、城山神社祭祀行事として県の無形民俗文化財に指定されている。また祭礼時に屋台の前で奉納される二人立の獅子舞は、志加奴神社にも奉納されており、志加奴神社・城山神社獅子舞として県指定無形民俗文化財に指定されている。

次は狂歌について説明する。

狂歌に「旅客」という言葉が出てくるが、鹿野里は鳥取と鹿野を結ぶ鹿野往來の宿駅として指定されていた。鹿野往來を旅する「旅客」が、宿駅である鹿野里の茶店で一休みしているのである。亀井茲矩が鹿野城に來た後、鹿野里は一時寂れたが、宿駅に指定されたおかげで物資の集散地となり、復興したという。

また、「小男鹿」というのは、牡の鹿のことである。この「小」という字は語彙を美しくする為のもので、鹿野里を小男鹿と言い換えることで、鹿野里の美しさを表わしているのだと思われる。

続いて、無駄安留記に記載されている絵について説明する。絵には、山が三つ描かれている。絵の右上に『鹿奴城跡 鷺峯全図』と書かれていることから、一番奥にある大きい山は鷺峯山だということが分かる。また、右手前の小さな山には「城跡」と書かれており、これが鹿野城跡のある城山である。その左にある山と麓の建物については何も書かれて

いなかったもので、現在の地図で調べてみると、愛宕山という山と、凌泰山雲龍寺という寺だということが分かった。この寺は、曹洞宗の寺で、本寺は讓傳寺である。寺領は三十六石九斗二升七合ある。また右下には鹿野里が描かれている。

次頁の実際の写真と比較した結果、絵と写真は合致していた。絵で鷺峯山が実際よりも大きく描いてあるのは、この山が昔から地域の人にとって神聖で特別な場所であるため、作者が強調したからだと考えられる。

鷺峯山についての記述が『鳥取県の地名』にある。鷺峯山は標高九二〇・六メートルで、山体は花崗岩類の基盤を貫いて噴出した第三紀末鮮新世の角閃安山岩などで形成されるが、浸食され孤立峰となっている。古くより因幡の秀峰として知られ、山名は八千弋神が鷺に乗って降りた山であったことによるとされている。しかし由来には幾つかの説があり、『因幡志』では第六代孝安天皇五年六月二十四日、富士山と同時に爆發してできた山で、往古山中に十の坊舎があったので十坊山と呼ぶようになったとか、亀井茲矩がインドの仏跡にちなんで鷺峯と名付けたなどの説を載せる。しかし亀井統治の時代以前から鷺峯の山名でよばれていたよう





で、日本海側から眺めると、山容が鷲が翼を広げた姿に似ていることから名付けられたものだと推測されている。

また『因幡志』には次のような説話が載っている。昔、因幡の鷲峯の神と伯耆の大山の神が戦ったとき大山の神が鷲峯を追詰めたため、鷲峯の神は自らの山の首をつかんで大山の神に投げつけ、さすがの大山の神も辟易して再び攻めてこなかったという。このとき鷲峯の神が投げた自らの山の首が勝部谷に落ち、現在の青谷町田原谷の建山となったというものである。なお『伯耆民談記』では建山でなく、現北条町国坂の茶臼山であるとする。

また『稻場民談記』には鷲峯山について次のような記述がある。

当国中ノ高山也。自余ノ高キ
山ハ皆峰ニ続キテ屏風ヲ引回
シタル如ニシテ、山ノ景勝美
シカラズ。此山ハ半腹ヨリ上
山巔挺秀シテ地勢屈起セリ。
上ハ千仞ノ剣峰青霄ヲ衝破
シ、下ハ四面ノ朶嶺翠岫栄帯
セリ、(中略)四時の烟景十里
ノ晴望奇異ノ佳境ト謂ツベシ

これを現代語訳すると、「当国
の中でも高い山である。そのほか
の高い山は全て峰に続いて屏風を
引き回しているようで、山の景色

は美しくない。この山は半腹から上の頂がぬきんでており隆起している。
山の上部は高くそびえたつ剣の峰で空を突き破り、嶺が垂れ下がった山
のまわりでは翠がとりまいていて。季節ごとの霞がかった十里四方の晴
れた眺めはまことにすばらしい場所といえる」となる。

このような鷲峯山の記述からは、神々しさと景色の美しさを兼ね備え
た山の姿が浮かびあがってくる。無駄安留記の作者もこうした様子を表
したかったのではないだろうか。

【参考文献・URL】

『因幡志』

『因幡民談記』

『日本歴史地名体系第三十二巻 鳥取県の地名』

『鳥取県 郷土が誇る人物史』

「鳥取県公式Webサイト」

<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=10142>

「花見川水系の歴史的景観」

<http://chiba.fc2web.com/hananiyawashiro/ookubojoimonomi.html>

「鳥取・鹿野温泉の宿、観光、食事処」What たう Now の旅」

<http://www.shikano-net.com/index.html>

「Google マップ」

<http://maps.google.co.jp/>

「鹿野大図鑑」

<http://www.shikano-net/db/cera/001.html>

(下垣 友佳里)

小別所谷口茗荷

小別所とは、鹿野町の鷲峯山の麓にある鷲峯村の北に位置する集落で、河内川の左岸にある。その小別所谷口に、正月に茗荷が生えたと、無駄安留記に書かれている。

是村中清水田の側に正月茗荷の僅に萌生するを採て某に上るよし、毎年恒例と。

雪の中に萌る茗荷は腹に先づ
いらぬうちから時を忘るる

本文のほうを現代語訳すると、「村の中にある清水田の側に、正月に茗荷が少し出てくる。その茗荷を採って「某」に献上するということがある。毎年恒例だ」となる。「某」が何を（または誰を）さすのかはわからない。

つづいて掲げられている歌も、茗荷を歌ったものである。茗荷は、食べるものを忘れるといわれている。その由来は次の通りである。

仏陀の弟子（十六羅漢のひとり）、周利槃特しゅうりはんてくは非常に物覚えが悪く、自分の名前さえ忘れることがあった。そのため、自分の名前を書いて首にかけていた。彼の死後、その墓場に見たこともない草が生えたため、これを茗荷と名付けたのが茗荷の由来である。転じて茗荷を食べると物覚えが悪くなるとされた。

そのことから、「腹に先づいらぬうちから」とは、雪の中にはえる茗荷は口に持つていくと腹に入れる前にものを忘れてしまう、と解釈できる。「時を忘るる」とは、正月に茗荷がはえることは、季節外れで時を忘れている、ということになる。歌の全体を解釈すると、「雪の中にはえる茗荷は腹に入れる前にものを忘れてしまう。また、冬に茗荷がはえることは季節外れだ」となる。

無駄安留記の本文には、正月に茗荷がはえると記されている。しかし、茗荷は本来春から初夏の頃に芽を出すもので、冬にはえる植物ではない。調査で小別所を訪れ地元の方に話をうかがったが、正月に茗荷が生えることがあるという話は出なかった。

しかし、インターネットで検索したところ、京都府綾部市の阿須々伎神社に「茗荷祭」という祭があること、その祭には正月に茗荷がはえるという伝説がともなっていることがわかった。

茗荷祭とは、次のような祭である。二月三日の未明に茗荷を掘り出して、茗荷の生育状態でその年の稲作の豊凶や水難を占う。志賀郷の七不思議の一つに数えられている。

この祭には次のようないわれがあるという。今からおおよそ一四〇〇年前の崇峻天皇の頃、大和朝廷は国の中心勢力を固めるため、金丸親王を遣わし、丹波の国々の地方豪族を征伐することになった。すさまじい戦いに悪戦苦闘の末、ようやく丹波の国々を平定した金丸親王はおおいに

喜び、これ一重に神仏のおかげによるものと、丹波の国々に七仏薬師如来を納め、国家の安泰を祈った。また志賀の里の「藤波」「金宮」「若宮」「諏訪」「向田（後の篠田）」の五つの社を厚く信仰されたという。親王の子孫、金里宰相は、この五社の大明神に千日参りをし、これを記念して藤波大明神には「藤」、金宮大明神には「茗荷」、若宮大明神には「萩」、諏訪大明神には「柿」、向田大明神には「竹」をお手植えされ、国家の安泰と子孫の繁栄を祈願され、このことを大和朝廷に報告した。この日以来、この志賀の里にいろいろ不思議な奇瑞があらわれるようになったということである。

その金宮大明神の「茗荷」は、毎年旧暦の正月三日になると、日の出より八時までの間に、清水の流れる「お宝田」から三本出る。そして、その茗荷を採って神前に供えていた、ということである。

この内容は、正月に茗荷が出ること、それを献上するという点が、無駄安留記の小別所の記述と共通している。もしかすると、作者はこの伝説を知っていたのかもしれないが、そうだとすると、小別所で逸処が聞いた正月に茗荷が生えるという話や、「某」に献上する「毎年恒例」の儀式自体と関係があるかどうかは不明である。

○阿須々伎神社に伝わる伝説

<http://www.ayabun.net/bunkazai/annai/asusuki/myoga.htm>

（鈴木 亜希子）



小別所から見た鷲峯山

布施の清水

布施の清水のある気高町殿村は北にある飯里村と南にある小別所の間
に挟まれた場所に位置している。『気高町誌』『新修気高町誌』（一九七
七年、二〇〇六年）によると、「布施の清水」のほかに「八幡さんの清水」
「くせの清水」とも呼ばれている。

無駄安留記に布施の清水を描いている絵があるのだが、そこには「小
別所 布施水」と布施の清水が小別所にあるように書かれているが、『因
幡志』殿村の段に「普瀬井の清水 村の上外れ一軒許り氏神八幡山の麓
にあり」とあるように、調査をしていく中で実際はこの地は気高町殿村
に位置していることがわかった。

実際に調査に行つて撮つた写真と無駄安留記に描かれている絵とを比
べると、概ね一致する。ほとんど当時のまま残っているのであろう。

無駄安留記には次のように文章と和歌が
記されている。

八幡宮御手洗水 布施の清水 山下の
浅池なり。熱夏にも三度泳ぐ者なしと。
其冷こと甚し。

夏ながらあつきにまけぬ真清水は
男山なる神のしるしか



文章を現代語訳すると、「八
幡宮、布施の清水は山の下に
ある浅い池のことである。熱
夏にも三度泳ぐ者はいない」
という意味となる。『因幡志』にも「廣さ十量許り深さ一尺余の清水井
なり。山下の岩根より涌出る水勢宛も地中に川あるが如く清潔透明なる
こと底に徹して水なきが如し。寒冷なること夏日此井を歩むこと三廻す
るもの希なり」と記してある。無駄安留記の本文、『因幡志』にあるよ
うに、実際の布施の清水は綺麗に底が見える浅い池であった。調査に行つ
た日は真夏であったのにもかかわらず池の水はひんやりとしていた。写
真からも池の底を見ることができ、池が浅くとても綺麗であることがわ
かる。

また、近くに池の説明が載っている看板があった。そこには、「(気高
町誌より) この清水が何時頃湧き出たのはわかっていませんが、「八幡
さんの清水」とも呼ばれ、豊富な水量と良質清冷をもつて近隣に広く知
られており、亀井武蔵守茲矩が「その清冷さ氷のごとき」と賞賛し、傍
らに涼亭を設けて納涼したといわれています。明治四十二年には、境内
より流れ出る水を利用して町内でも初めての水道が村民(当時五十六戸)
の力によってこの道路沿いに布設され、その長さは八〇〇メートルあり、
道往く人も自由に飲用できるようになっていました。近年もこの湧き水
は、一日当たり約一〇〇立方メートルが簡易水道に、その他は農業用水





等を利用して、地域住民の生活に密着しています」とあった。

「気高町誌より」とあるように、『気高町誌』にこの看板と同じ記述があり、より古くは『因幡志』にも、「近世亀井武蔵守殿此水を賞美せられ側に涼亭を設け夏日には来りて納涼ありけるが井の中の築石に心を盡し手を込られしと土人の口碑なり」と記してあった。

水道についても『気高町誌』に同様の記述があり、明治四十二年（一九〇九）一月に、布施の清水を水源とした水道が敷設されたという。一般的には、昭和三〇年（一九五五）、気高町が誕生してから簡易水道が敷設されたのだが、この殿村の水道はそれより四十六年前に設けられていたことになる。現地の調査でも、町の道路の脇のいたるところに水道が設置されていることが確認できた。看板に記してあるように、この清水は現在でも地域住民の生活に密着しているようであった。

また、『気高町誌』『新修気高町誌』には、『勝見名跡誌』からの引用があり、「くせの清水」に伝わる次のような不思議な現象について記されていた。

昔、殿村の里にくせの清水というものがあつた。八幡宮の山の下からふつと湧き出る勢い、ちょうど地中に川があつて、ここに水のおふれ出るかと怪しまれるほどである。この水は清らかで冷たく、酌んで飲むと味わいがある。先年、この国に大地震のあつたとき、この清水の色が変わり、朱よりも赤くなつた。百姓はこの水を通じて田に入ると、次第に水の色が薄くなり、普通の水になつた。ただし、田の中の土を見ると、あれほどの紅い色がどこにもない。水草の根など眺めても跡かたない。この朱色の水を茶わんに酌んでおくと、入れたときは真っ赤だが、時がたつに従つて清水となる。しかも茶わんの底に、水かすのようなものが少しも残らない。あの色はどこに行つたのか、人々は大いに不思議に思つた。「くせの清水」とは、「くしの清水」をなまつたものかもしれない。

次に、八幡宮（現布勢平神社）についてである。先ほどの無駄安留記の和歌を現代語訳すると「夏なのに暑さに負けない素晴らしい清水は、男山にある神の不思議な御利益のおかげなのだろうか」という意味となる。男山にある神とは京都の男山にある石清水八幡宮の神様のことを意味し、その神を鳥取に分けてこの八幡宮にもつてきて祀っているという意味である。

現地調査の際、偶然社殿を修繕している町の方の話を伺うことができた。その方の



話では、亀井茲矩が朝鮮出兵する前にこの神社に立ち寄り湧水で刀を磨いた、という逸話があるようだ。八幡宮に祀つてある神は武力の神であり、亀井茲矩は戦の前にその御利益をもらいにきたのではないかと考えられる。よく似た逸話は『因幡志』にも「長さ二尺許りの自然石あり。是は亀井殿新太郎と云える時此石にて刀を礪き戦功を立られけると。又土俗に婦人乳の出ざるもの此井後の溝をさらへ側なる石地藏を祈れば乳出つると諸人信仰す」とある。亀井茲矩はこの地で納涼をしたり、大事な戦の前に立ち寄ったりと、この地を特別な場所として捉えていたと考えることもできる。また、この神社には『因幡志』に記してあるように、武力の神が祀つてあるだけでなく、授乳の御利益を求める庶民の信仰も集めていたようだ。

社はとても古い様子だったのだが、何度か修繕されているようで、外観はとても綺麗であった。階段は、社と同じように掃除や手入れなどがきちんとされており、とてもきれいでこの地を地元の人が大切にしているのだな、と感じた。

(横田 猛夫)



小林山 讓傳寺

讓傳寺は、現在の鹿野町今市の南西、小林山の麓にある。無駄安留記は山号を小林山としているが、正しくは少林山である。宗派は曹洞宗で、この讓傳寺は、因幡において曹洞宗の進展の拠点となったという。『日本歴史地名大系三三卷 鳥取県の地名』によると、雲龍寺・松泉寺のほか、龍徳寺（現若桜町）・長泉寺（現鳥取市気高町）などの開山には、当寺の歴代住職を迎えたと言われる。近世には周防国吉敷郡泰雲寺（現山口市）の末寺となり、末寺一六ヶ所、寺領高三四石九斗四升八合を有した。現在本堂には、当寺に帰依し、寺領を寄せたこともあった鹿野城主・亀井茲矩の位牌が安置されている。宝暦十一年（一七六一）には、茲矩の一五〇回忌の法事が行われており、鳥取藩からも藩主代行の使者が派遣されている。

讓傳寺の前身は、十四世紀頃小別所村に存在していた法成寺である。『少林山誌』に載っている「和尚の記録」や『因幡志』によると、これが一度鷲峰山南麓古仏谷に移されて臺王山抱月寺となるが、茲矩が参禅するのに路が険阻で難儀であったことから、今の少林山に移動し、現在の少林山讓傳寺と山号寺号を改めたと伝えられる。しかし『鳥取県の地名』には、一説には茲矩の戦略上の配慮による移転であり、戦国時代の城主達は城郭防衛のために寺院を再配置していたことなどもあって、城下町を綿密に計画するための移転だったという可能性もある、と記されている。

無駄安留記に、次のような記述と歌がある。

小林山讓傳寺閑静の地なり。
什物亀井侯御遺物。
陣団扇。馬角。蟹甲〔丈一尺余川蟹なり〕。

八股の鹿野の寺には

またなき馬の

角もありけり

まず、記述を現代語訳すると、「小林山（少林山）の讓

傳寺は、落ちていていて静かなところである。代々伝わる宝物は亀井茲矩の遺物、陣団扇、馬の角、蟹の甲羅がある。蟹は長さが約三〇センチ余りの川蟹である」となる。次に歌を現代語訳すると、「八股の鹿野のお寺には、またとない馬の角もあった」となる。陣団扇とは軍配団扇（軍配）のことだと考えられる。軍配団扇とは昔、大將が軍の配置・進退の指揮をするのに使った武器のことである。

本文で紹介される亀井茲矩の遺物については、『少林山誌』や『因幡志』で説明されている。有名なものには、朝鮮王陣旗・朝鮮王陣羽織・朝鮮王敷物の染織物三枚がある。朝鮮王陣旗・朝鮮王陣羽織は占城国（インドシナ半島の一部）織物、朝鮮王敷物も南物諸島地区織物である。繊維



品は麻が中心で、山陰道地域では綿の栽培も行われていなかった戦国時代の我が国においては、これらの毛織物や木綿織物は貴重なものと考えられていた。

他にも、九点の宝物が残っている。朝鮮王陣中の呼子であった朝鮮王陣鉢、また朝鮮王秘蔵の什宝である天狗の爪・駒の角・印度赤梅檀の葉。朝鮮王軍麾は、亀井茲矩が軍を指揮するのに用いたと伝わっている。無駄安留記に出てくる「馬の角」はこの「駒の角」のことではないかと思われる。さらに亀井茲矩が陣中に自ら捕獲した猛虎の爪、凱旋の際記念品として持ち帰った朝鮮松の実、身辺から離さず身に付けていた金欄の袈裟、周囲が二尺八寸二分厚五分強もある蟹の甲羅などがある。

これらの宝物が、亀井茲矩が文禄の役に従軍した際に持ち帰ったものなのか、それとも朱印船貿易によって南洋諸国から買い取ったものなのかは明確ではない。なお、染織物三枚は貴重な美術・工芸品とされ県指定文化財となっている。現在は保存上鳥取県立博物館に寄託、時折県民に公開されている。他の九点については、讓傳寺の本堂に常時陳列している。

無駄安留記には、先程の記述にも蟹の甲羅が登場したが、蟹と蟹の甲羅についてのさらなる記述と歌がある。

是蟹後谷池の中に栖むこと幾千歳なり
しに、ある知識の世に、或夜枕上に到
り依頼して菩提心を起し和尚に約して
さる。明日、人をして水中を視せしむ。
はたして甲を得たると。今什物の一と
す。大きさ鍋蓋のごとし。



横に行蟹も御法をあなかしこ
聞て佛の道に這ひこむ

記述を現代語訳すると「この蟹、後谷池の中に住んで数千年が経った時に、ある名僧の時世に、ある夜枕元にやってきて、依頼して悟りを開こうとする心を起こし、僧に約束して去った。翌朝、人に命じて池の中を見させたら、本当に蟹の甲羅を得た、と。今はこれを什物の一つとしている。大きさは鍋蓋の程である」となる。次に歌を現代語訳すると、「悪行に走る蟹も仏法を恐れ多く思い、聞いて仏教の教えに進んだ」と解釈できる。

また、この本文に登場する蟹は、『少林山誌』にも記されている。これに登場するのは、蟹が淵というところに棲息し、付近を通る鳥獣や人に害をなしていた大きな老蟹である。忠岳という大徳の授脈の法に感化され、転生の善果報を得たこの老蟹は、その恩恵を広く世に披露しようと自らの甲羅を捧げたという。無駄安留記と『少林山誌』の蟹を比べてみると多少の違いはあるが、どちらも悪行をしていた大きな蟹が仏の力により更生し、甲羅を捧げたということから、似た伝説であると解釈できる。

(土島 さき)



梶宿大明神

梶宿大明神は、現在では加知弥神社と呼ばれている。鳥取市鹿野町寺内集落の東方にあり、県道三三号線の西側にある。祭つてある神は、彦火火出見尊、鵜草葺不合尊、玉依姫の三神である。

『鳥取県の地名』によると、現在地に移ったのは中世のことで、それまでは現在地背後の野溪山と呼ばれる山にあったと記されていた。詳しい場所は定かではないが、現在とは違う場所にあった可能性がある。また『因幡志』は野溪山にまつわる次のような説話を載せている。

村上天皇の第六皇子勝美親王は気多郡領主紀氏郷の娘桜姫に恋慕、因幡国に都から地方へ下ったが、気多郡宿村（現気高町）に至ったとき病にかかった。親王は同所で力尽き、天延三年没した。二年後の貞元二年終焉の地に皇子を神として祀り、勝美の神社・勝宿宝聖宮などと称し、祭神を勝宿宝照権現と呼んだというものである。

これは、梶宿大明神の創設に天皇家の恋愛話が関係していたことを示しているが、村上天皇の皇子に「勝美親王」を見つけることはできなかった（『平安時代史事典』角川書店、一九九四年）。

また、ここに登場する桜姫について、詳しい話が『鳥取県伝説集』に二つ記されていた。一つは、桜姫の仏道帰依の話であるが、もうひとつが勝美親王との恋愛話であった。太筋は『因幡志』と同様だが、『鳥取県伝説集』のほうでは桜姫のほうに先に行方をくらまして親王はそのま

ま生きながらえて、それが勝宿大明神として祀られたとされている。

彼女は生まれながらに気品が高く、しかも成長するに従って国中に並ぶ者もないほど美しい娘になったそうである。当然、ねんごろに言い寄る男は後を絶たなかったが、桜姫はそういった男達の望みには一切答えず、ただひたすら心を仏道に傾けていた。あるとき、桜姫は観世音菩薩に導きを受け、ある一本の桜の木にたどりついた。菩薩は桜姫に「この木でわが姿（菩薩）を彫刻しなさい」というお告げを下した。桜姫はお告げの通り、九十九日かけて菩薩の像を彫りあげたところ、それは菩薩の姿と寸分違わないものであった。

また、無駄安留記には次のように記されている。

梶宿大明神 近邊の大社なり。田圃の中に鎮座。けさ見れば梶の宿りの神垣を



すずしめ申す秋の初風

これを現代語に訳すと、「梶宿大明神 気多郡鹿野町近辺の大きな神社で、田んぼの中に立っている」となる。

無駄安留記の絵をみると、確かに広い田んぼの中に長い参道が本殿へと伸びている。また本文に「大社なり」とあるが、梶宿大明神は中世以降様々な武将から厚い崇敬を受けていた。永禄八年（一五六五）には武田高信、田公高清、矢田幸佐が社殿を造営しているし、天正八年には吉川元春が戦勝を祈願して社領を寄進している（以上『鳥取県の地名』）。吉川元春とは、戦国時代の武将で、毛利元就の二男である。安芸国北部から石見に力を持っていた吉川興径の養子となり、一五四七年家督を継ぐ。毛利氏の勢力拡大に弟小早川隆景とともに宗家毛利氏を支援。川の子が共通するところから「毛利両川」といわれた。山陰からの尼子氏の掃討、羽柴秀吉軍との退陣を指揮、毛利氏と秀吉の調和後、秀吉に帰順することをよしとせず、隠退した人物である。さらに社伝によると、天

正年中豊臣秀吉は防己尾城落城の時社領を寄進したそうである。



歌は「立秋の日の朝、梶宿神社を見ると、神社を取り囲む囲いや祭られている神様をすずませ、その心を慰める秋の初風が吹いていた」となる。歌の作者は、梶宿大明神の「梶」から、梶の葉を連想したのではないかと考えられる。梶の葉は、七夕に筆の上達を願うときに用いる植物なのである。七夕といえは秋の行事である。この句は、

梶宿神社の「梶」の字に秋をかけたものであると考えられる。

また、『鳥取県伝説集』には梶宿大明神についての伝説も記されている。昔、鷲峰山の西側を流れて日本海にそそぐ河内川の堤防は、大雨が降るたびに切れて洪水となり川沿いの村々に大きな被害をもたらしていた。その年も、梅雨のために大雨が降り続き、止みそうになかった。河内側の近くの鹿野町今市に住んでいた竹森惣兵衛は、その雨の夜不思議な夢を見た。白い立派な馬に乗った神様が、猛烈な勢いで走って来て惣兵衛を起

こしたのだ。惣兵衛が驚いて目を覚ますと、夢の続きは現実になっており、惣兵衛は神に導かれるままに河内川の堤防の上に出た。堤防は今にも切れかかりそうであった。惣兵衛は神に言われるがままに、大石で切れそうな堤防を補強した。おかげで村は洪水から免れることができた。あくる日、村人が堤防へ来て見ると、惣兵衛が倒れていた。村人は堤防が大石で補強されているのに気付き、あたりにあった馬の蹄の跡をたどってみると、氏神である梶宿大明神の境内に入っていた。それ以来、梶宿大明神は治山治水に靈験あらたかな神として、厚い信仰を寄せられるようになったそうである。この伝説からは、梶宿大明神の近隣の村人が、厚い信仰を寄せていることがうかがえる。

最後に、この梶宿大明神からは鳥取を代表する国学者が出ている。



飯田秀雄は、梶宿大明神神職飯田信秀の末子である。彼は寛政三年（二七九一）八月十五日生まれで、幼い頃から才智に優れ、文化四年（二八〇七）、十七歳の時衣川長秋の門に入った。衣川長秋（一七六五―一八二二）は、江戸時代中期・後期の国学者である。伊勢（三重県）出身で、本居宣長にまなび、享和三年（一八〇三）因幡鳥取藩主池田斉邦にまねかれて鳥取に來遊し、国学・和歌を教授した。文政五年二月一日五八歳で死去。著作に『百人一首峯梯』『田簀の日記』などがある。飯田秀雄は天保年間に和歌山に遊学して本居太平に学び、また加納諸平

と親交を結び鳥取に柿園派の歌風をもたらした。

さらに、飯田秀雄の次男、飯田年平もまた和歌山で本居内遠・加納諸平に学び国学者・歌人として名を挙げた。年平は万延元年（一八六〇）『国学并詠草稽古の次第書』を藩に差し出し、幕末の藩校尚徳館などで、国学の普及につとめるだけでなく、明治新政府にも出仕している。

（山本 由佳莉）

○報告書作成に関して参照した主な文献一覧

- 『鳥取県の地名』（平凡社、一九九四年）
- 『稻葉民談記』（上・下巻 徳永識男註、日本海新聞社、一九五八年）
- 『因幡志』（『因伯叢書』三卷所収、名著出版、一九七二年）
- 『酒ノ津散歩』（橋本寿雄著、一九八六年）
- 『鹿野町誌上・下』（一九九二年、一九九五年）
- 『気高町誌』（一九七七年）
- 『新修 気高町誌』（二〇〇六年）

なめし 滑石阪

滑石坂(無駄安留記では「阪」と表記されているがここでは「坂」に統一)は鹿野から三徳山の門前や三朝温泉を経て倉吉にいたる鹿野道に位置している(『鳥取県の地名』)。この滑石坂から鹿野方面へ行くには峠を東に、三徳山方面に行くには西へ下っていくことになる。旧道は、現在通行することができず、かなりの難所であったと言われている。さらに、江戸時代の『因幡志』にも「警固屋の向ふ荒神山古城の下手の谷より入りて坂にかかる、谷隘より峠に至りて二十四町最も急峻也」と記述されており、この坂の急さをうかがい知ることができる。

それでは、ここから無駄安留記の中での滑石坂について見ていきたい。

是坂道九曲にして小石を踏みて登ること凡三十余町、頂に到れば郊原國堺の地蔵を越えて、ゆくゆく見るに早蕨叢生して、男女此方彼方に採るさま、いと春気色。おもしろくおぼゆ。ここに阪路のあゆみくるしく、かいたる汗もしばし忘却す。

これを現代語に訳すと、「この坂道は九曲している。小石を踏んで登っていくとおよそ三千メートルで頂上に到着する。頂上の國堺の地蔵を越えて、歩きながら見てみると蕨が生えている。それを男女があちこちで採っている様子はとても春らしい様子で、それをおもしろく思っている」と坂道を登るのが苦しくてかいた汗もしばし忘れてしまう。」となる。

この本文は鹿野側から滑石坂を登っている描写になっていると推測できる。なぜなら、筆者は気多郡を東から西に歩いてきたからである。無駄安留記に書かれた場所の位置を順に地図で確認するとこのことが分かる。つまり地図上で鹿野の西に位置する滑石坂を筆者は鹿野側から登って行ったと考えられる。ここからは本文が鹿野側から描かれているということを前提に、私たちが実際に現地を訪れた際に発見したものを交えて見ていくことにする。

まず、調査では本文に即し鹿野側から登ってみた。本文の書き出しでは「是坂道九曲にして」とある。そして、ここで絵を参照していただきたい。これは無駄安留記に描かれている滑石坂の絵なのだが、本文の通り道が曲がりくねっている様子が描かれており、この絵からも滑石坂の大きさをうかがうことができる。

次に本文では「登ること凡三十余町。頂に到れば郊原國堺の地蔵を越えて」とある。「町」というのは長さの単位で、一町が現在の約一〇九メートルにあたる。先ほどの現代語訳でも述べたが少なくとも頂上まで三〇〇メートルはある。実際の調査で、鹿野側から頂上を目指し登っていくと途中で二つの道しるべを発見した。最初に発見したのが写真1である。これには「右ハ三とく 左ハ山道」と彫られてあった。次に発見したのが写真2で、これには「左みとく道」と彫られてあった。この





写真4



写真3



写真2



写真1

二つ目に発見した道しるべから先は行けそうになく登ることができなかった。しかし、この二つ目の道しるべを発見するまでの道のりでさえ本文に書かれているように曲がりくねっていたため歩くのが大変で、途中の段階でもとても長い坂だなという印象をもった。

鹿野側からの調査が困難なため、本文の地蔵を発見するために三徳山側から登ってみることにした。すると、本文に出てくる頂上の國境の地蔵はこれではないかと考えられる地蔵(写真3、写真4)を発見した。この地蔵には一部読めない部分があったものの「これよりみとく山 門前村中」と彫られていることは確認できた。ここで、頂上の地蔵に彫られていた「門前村」について少し見ていきたいと思う。この門前村は三徳川の上流に位置し、ほぼ東西に倉吉往来(鹿野道)が通っている。南に三徳山がそびえていて、村名は三徳山三仏寺の門前にあることにちなんでいる。この村は倉吉往来を利用した参詣者の門前町としての役割を果たしていた。それゆえ、門前村中は、三徳山への道案内を兼ねた地蔵を設置したと考えることができよう。

さらに、本文では、「ゆくゆく見るに早蕨叢生して、男女此方彼方に採るさま、いと春気色おもしろくおぼゆ」とある。現地に調査へ行った際にこのような場所で蕨をとっていたのかなという場所がいくつもあった(写真5)。筆者はこのような場所で蕨を採っている男女を見て春らしさを感じたのではなからうか。

最後に、無駄安留記には次のような狂歌が記されている。

きのぼりの する程くるし さるにても
すべ 迂りころげる 滑石のみち

これを現代語に直すと「木のぼりをする猿でさえもくるしむほど急で、すべりころげてしまう」となる。本文を読み、実際に調査にも行ってみると、筆者がこの和歌を読むのうなずけるほどの急な坂道であった。調査で地蔵を発見するために通った道でさえ歩くのが大変であり、現在では通ることのできない鹿野側から国界の地蔵までの道を筆者は歩いて登ったのだから、猿がすべりころげるという表現も納得できる。

(熊田 哲)



写真5

おわりに 〱 調査全体を通じて見えてきたこと 〱

今回調査に行った亀宮や梶宿大明神・鹿野城などの名所とされているような場所は無駄安留記に記述されているだけでなく、『因幡志』にも伝承などが記載されていた。しかし、水尻池や母来阪・滑石阪など地形に関する場所は無駄安留記以外のものからは残念ながら見つけることができなかった。私たちはなぜ地形に関する記述が無駄安留記にのみ記載されているのかを考えてみた。そして無駄安留記は作者が実際にさまざまな場所を歩いてみて、通るのが大変だった道や印象に残った場所を記録したためだと考えた。

実際に調査に行ってみると、『因幡志』などに記載されている鹿野城や譲伝寺などは今でもかつての状態をよく残しており、歴史を感じることもできたが、地形に関してはそうではなかった。母来阪は現在でも通ることができ、滑石阪は現在も通ることができなくなっていた。また、今回は取り上げていないが、白兎海岸近辺の杖突阪を調べてみるとこちらも通ることはできなくなっていたりしている。今では人が通ることのない道を当時は歩いていたのだから、印象に残るほど歩くのが大変なのは当然で、それを無駄安留記に残そうとするのも納得がいく。私たちは当初、作者は意図的に地形と名所を多様に記録することで無駄安留記に厚みを持たせるためにしたのではないかと考えていたが、実際に調査に行ってみると、意図的に記載した部分もあるだろうが、記載されている全てが厚みを持たせるために記録されたのではなく、「風景が素晴らしい」など作者が印象に残ったことを細かく記録したものが積み重なり、結果として無駄安留記に厚みが出てきたのではないかと考えるよう

になった。

また、無駄安留記本文に登場する亀井茲矩についても触れておきたい。なぜ亀井茲矩についてまとめてみようと思ったかというと、本文に亀井茲矩の名前が複数登場すること、調査していくうちに本文には登場しない場所でも、訪れてみると亀井茲矩に関係している、ということが分かったことがあったからだ。亀井茲矩に関係している場所はすべてそのほとんどが気多郡とくに鹿野町に位置している。作者は今でいう鳥取市内の人間だったことから考えると、亀井茲矩にそれほど詳しくあったとは思えない。それなのになぜ亀井が無駄安留記に頻繁に登場するのだろうか。私たちは、作者が鹿野を訪れた時に、町の人々から亀井茲矩が行った政策などさまざまな話を聞いたのではないかと考えた。無駄安留記を制作した当時からしても亀井は二百年も前の人物であるにもかかわらず、人々に語り継がれていたことを考えると、鹿野の人々からみて亀井茲矩がしたことは、印象深く、ありがたい政策だったのだろうと推測できる。ここから分かることは、無駄安留記は、作者の主観だけでなく、歩き回った地域の人々の思いや関心も取り入れながら制作されているということだ。したがって、無駄安留記を調査することによって、その地域の、当時の雰囲気、ひいては住民の意識を知ることができるのかもしれないと、わたしたちは思った。

(熊田 哲)



調査の記録





【開催日】2011年1月22日(土)
【場所】とりぎん文化会館第一会議室

